慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マックス･ウェーバーの社会主義像 : Ehelichsozialismusを模索しながら
Sub Title	An interpretation of Max Weber on socialism
Author	樋口, 辰雄(Higuchi, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1980
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.20 (1980.) ,p.47- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000020-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マックス・ウェーバーの社会主義像
——Ehelichsozialismus を模索しながら——
An Interpretation of Max Weber on Socialism

樋　口　辰　雄
Tatsuo Higuchi

This study intends to clarify Max Weber's view to Marx and socialism in his sociological frames of reference which are called methodological individualism. It is not sufficient for us to understand the present complexed situations of socialist countries exclusively depending on his books written before seventy or so. But there is some important core in his theory based on ideal-types he constructed through substantive studies on world economic history. In our intellectual tradition, socialism has been regarded as a necessary outcome of capitalism. Modern scholars have came to recognize that the European-type rational capitalism is not the same as ours historieally based on patrimonial human relations, but many authors, particularly Marxists, studied in their own angle. Situations in socialist countries, e. g. in China, south-east's and Soviet Russia, force us another frame work different from Marxist's. The significance of Weber for modern world consists in his perspective of historical human types, which are gathered from different kinds of culture. His Verstehende-Soziologie will provide us a key to our problem.

「汝らがこの立場を取るべく決心するとき，汝らはこの神にのみ仕へ，他の神には侮辱を与えることになる」

（ウェーバー）

(1)序　一つの立場
(2)ウェーバーの階級像
(3)ブルックスのロシア経済観

(1) 序　一つの立場

文化的特質は，総じて学問方法に或る抜きがたい色調を賦与する，といわれる。それは，ドイツの文化とオーストリア＝ハンガリーのそれが，例えば歴史学派とメンガーの抽象的経済理論（＝オーストリア学派）という形をとって現われたように。ところが，同じ「老いた国家」（ツヴァイク），オーストリアという知的文化環境の下で育ちながらも，L. v. ミーゼスとシュムペーターとでは，厳しい対照を示すものでもある。

早熟なシュムペーターとウェーバーは，ロシア革命の評価をめぐり，激しい対立をみせた。「かれらふたりは，ルドー・モリツ・ハルトマンとゾマリーとウィーンのカフエーで出あった。シュムペーターはロシア革命について満足の意を表明した。社会主義はもはや紙上の空論ではなく，生存能力のあることを証明した，というのである。マックス・ウェーバーは，激昂して，ロシアの発展段階での共産主義は，まさに犯罪であり，道は未曽有の人間の悲惨をつき切って行き，おそるべき破滅に終るであろう，というようにいった。「そうかもしれない。だが，われわれには本当に気持ちのよい実験室になりますよ」，とシュムペーターは答えた。「人間の屍が積みかさねられた実験室にね」とウェーバーはすぐいい返した。「解剖室はみんなそうなんですよ」とシュムペーターは応酬した」[1]。革命の翌年，1918年に二人はウィーンで数回会っている。その内一回は，ウェーバーが（人間）〈類型〉を問題にしたのに対し，シュムペーターの方はメカニズムをめぐって，均衡・不均衡を論じた，といわれている。おそらく，ロシア革命をめぐる，このちぐはぐなやりとりは，両者の基本的学問態度の相違を如実

に示すもの，と思われるが，細かな点は依然とヴェールにつつまれたままである。唯，同じ年，ウェーバーは，ウィーン大学夏学期に，「唯物史観の積極的批判」と題した，宗教社会学を講義している。又7月（安藤英治氏は6月と主張）に，「講演「社会主義」を，マルクス主義に対するウェーバーの見解として見る場合には，注意が肝要である。というのは，彼は，政治的＝戦術的考慮から自由でないからである。この講演によってウェーバーは，オーストリア＝ハンガリーの動揺する世論を鎮めたいと思ったのだ」(W. モムゼン)，といわれている講演をした。

オーストリアの将校を聴衆にむかえて，彼は，宗教社会学的な視角から，「共産党宣言」の性格規定を行った。それによれば，何よりもこの著書は，第一級の学問的業績 (eine wissenschaftliche Leistung ersten Ranges) であると共に，予言的文書 (ein prophetisches Dokument) でもある。私的資本主義的な組織が，没落せざるをえないこと，資本制社会が「個人の協力体 (Assoziation des Individuen)」へと移行する（この具体的内容に関しては，マルクス，エンゲルスは沈黙しているが）過渡的段階として (als Übergangsstadium)，プロレタアによる独裁にとってかわらざるを得ないこと，この中核に，「人の人にたいするあらゆる支配 (aller Herrschaft des Menschen über den Menschen) をおわらせないで，プロレタリアートはみずからを隷属から解き放つことはできない」[2]，という重要な命題があればこそ，この宣言が，世界の予言史の中で，しかもことごとく機械が支配する近代ヨーロッパ社会の中で，画期的な意義をもつにいたったのである，と。

一般に，「知識人が求める救済はいつも「内面的困窮」からの救済であり，したがってそれは，非特権階層に特有な外面的困窮からの救済に比べて一面では生活から遊離した，しかし他面ではいっそう原理的かつ体系的に把握された性格をもっている」[3]。近代の知識人が神とのつながりを切り落したのに対し，本来の預言者は，これに媒介されてのみ成り立つ。「預言者的啓示の意味は……，一つの統一的な生の視点が，意識的に統一され意味づけられた生への態度を通して獲得されるということである。生と世界，社会的事象と宇宙的事象，これらは預言者にとって体系的に統一された一定の「意味」をもつのである。したがって人間に救いがもたらされるためには，彼の行動はこの「意味」に定位されねばならず，またこの「意味」への関係を統一的かつ有意義になされねばならない」[4]。

神からの告知をうけ，聖意をつげることによって，平信徒に服従を見い出す有資格者が預言者であるとすれば，共産党宣言に於けるこの神に的当するものは，近代自然科学の発展と密接に結び合った，「自然法則」観である。ウェーバーは，〔地球という惑星が，いずれは太陽に衝突するであろう—エンゲルス〕自然法則の社会科学的意味を検討するため，窮乏化説，企業の寡占化，恐慌の不可避性，を各々論じているが，ここでは触れない。ただ，歴史的発展に関する，マルクスの「法則」観が，「18，19世紀までのニュートン力学を基礎にもつ自然科学的世界像とその基礎にある法則思惟」[5] であり，「マルクスの依拠した……自然科学的「法則」や「必然」の範疇は，今日の自然科学ではそのままではもはや通用していない」[6] ことを指摘した内田芳明氏，かかる問題性に早くから着した金子栄一の研究[7] が想起される。「「民族精神」や「国民精神」が，あたかも一つの主体のごとく構想されたり，法則そのものが歴史的世界ではたらく「力」や「傾向」として理解される」ような擬人観に対し，彼はメスを入れた。「社会法則の認識と，歴史における因果連関の理解とは，「現実的な力」をたどるのではなくて，ideal typisch な意義をもつということ，社会法則は一義的決定的性格をもつものではなくて蓋然的性格をもつ」[8] ことをウェーバーは主張した。

ちなみに，20世紀初頭から序々に，認識論上の革命が物理学に胎動し始めていたことを，湯川秀樹氏は，「物理学というものは，……自然の法則性を追求するという場合，法則性といえばけっきょく因果律が厳密に成り立つという意味だと考え，そういう個別的な因果法則を発見する努力をしてきたのに，……それが統計法則ということになった。こんなことは十九世紀の人は考えなかった。ニュートンも考えなかったし，一九世紀の初めに有名な確率論の本を書いたラプラスも考えなかった」[9]，と語っている。こうして，1920年代に量子力学が発展してから後，法則というものが確率的，統計的な性格をもつものと考え始められた[10]。自然科学における認識の大変革が，直接，ウェーバーの認識に影響を与えたとは思えないが（大塚久雄氏は，「経済と社会」の中でウェーバーが，法則をシャンセン Chancen として扱い，その中でも確率の高いものをゲゼッツと呼ぶ，こうした概念規定を1910年代にやっていること，を指摘している），それにも拘わらず，ウェーバーの時代状況が，まさしく自然観の点で，大きな過渡期にあったことは，確かな事実である。そしてまた，隣接諸科学，すなわち，精神物理学，生理学，確率論を含む哲学などの学問的成果に，鋭

く関心を払ってきた彼の性格から判断しても，こうした新たな時代のい吹きを見逃すはずはない，と思われる[11]。

(2) ウェーバーの階級像

歴史学派の落し子である，ウェーバーは，マルクスの思想から深甚なる影響をうけたともと一般にいわれ，又，いわゆるカウツキー主義に対しては，マルクスとは違った態度を示した，といわれている。既に，『国民国家と経済政策』でウェーバーは，「経済学の諸問題に光を与えようとして，自然科学の側から寄せらた論稿をみると，その大多数に共通したひとつの欠点は，なにがなんでも社会主義を論破しようという，まちがった功名心である」[12]と語り，自然科学的「淘汰」概念を安易に経済学の領域にまで拡張しようとする生物学主義を批判している。同様に，法哲学者 R. シュタムラーの，「著しく世を誤る書物」『唯物史観から見た経済と法律』に対しても，マルクスの立場をその論敵から守るため，反駁を加えた。

このように，19世紀末から20世紀初めにかけて，理論の説明妥当性をめぐる論争は，一部「学問の名による『世界観』の要求」という形をとりながら，一挙に噴出してきた。ダーウィンの亜流やシュタムラーの『克服』以外に，社会心理学，フロイト学派，ドイツ歴史学派の巨匠 G. シュモラーとの Methodenstreit で世に知られている K. メンガーの，いわゆる歴史的社会科学（歴史的理解）に対立する，理論的社会科学（理論的理解＝国民経済学は，一般的なものの繰返される現象形態の認識を目的とする。従って，現象形態の定型的関係に着目し，それらの『法則』を発見しこれを叙述する。経験的法則に裏うちされた理論は，逆にこんどは，経験的実在を『演繹』し，推論できる，とする立場[13]）としての抽象的経済理論がその好例である。いずれもこれらとの方法論的対決を通して，彼は，自らの足もとを堅めてきた。つまり認識論上の対決が，単なる形式的レベルに終始することなく，具体的な素材研究へのポジチブなスプリングとなってきた。

一方でマルクスを擁護しながら，他方でこれを相対化するウェーバーの態度は，首尾一貫したものなのであろうか。『客観性』での，マルクス，マルクス主義に対する批判は，きわめて錯綜していて，これらを実質的内容にまで立ちいって論じてはいない。回避している，と言うべきであろう。それは次のような言葉からもうかがわれる，「我々にとって極めて重要な理想的構成の例，即ちマルクスについて論証することは，わざと避けてきた。それは，マルクス解釈を引入れることによって叙述を一層複雑にしないためと，この偉大な思想家（den großen Denker）について，また彼に追随して現われる文献を今後規則的に批判的分析の対象にするであろうところの，この雑誌〔『社会科学及び社会政策雑誌』〕所載の諸論究を出し抜かないためであった。そこでここでは，一切の特にマルクス主義的な『法則』（alle spezifisch-marxistischen »Gesetze«）や発展構成（Entwicklungskonstruktionen）は一理論的に欠陥なき限り一理念型の性格をもっている，ということを確認するだけにしておく」[14]，と。

マルクスのみならず，ドイツ歴史学派経済学者を含めて，およそ文化現象総体の中から，「一つの特殊要素である経済要素」に関心を向け，経済科学という一つの社会科学にまで発展せしめた契機は，近代資本主義のもたらした物質的生存闘争，文化問題としての「労働者問題」であった，といえよう。労働者の困窮を人間文化の危機として真剣にうけとり，これを実践的，社会政策的に解決したい，と望む人間の価値関心が労働者問題を歴史的，理論的考察に導いた，大きな首石となった。農村共同体の崩解と労働力の流出や社会変動，近代資本主義の発展過程でいやましにます経済的要因と，時代に制約され変貌した姿で出てくる歴史的貧因の様相が，研究領域を大幅に拡げた。「問題の思想的連関が，科学の研究領域の根底に存する」[15]。

だが，まさしくこうした思想連関の間隙をぬうように，理論的ナチュラリスムス，独断的欲望，自然主義的一元論[16]が座を占めた，とウェーバーはいう。「近代の経済的変革の巨大な文化意義と特に『労働者問題』のすばらしい重大さに圧せられて，自己批判を忘却した一切の認識のもつ根絶し難い一元論的傾向（Monismus）がこの道に滑り込んだ」と。社会現象を，ぎりぎりの限界にまで追い込み，その固有法則性を個々の領域（経済，宗教，政治等）の特質に則して分析を試みること，こうした営為は，認識論哲学者の作業を踏み越える。この苦渋にみちた研究を，終生の課題としてとり組んだ彼にすれば，経済学的な因果欲求や，「『世界観』としての又は歴史的実在の因果的説明の公分母としての所謂『唯物史観』」[17]を拒否するという主張は，決して単なる言明ではなかった。この論文で彼は，無数に錯綜した利害の布置状況を，実は認識者の方でプリミチブな「無分化の集団概念（Kollektivbegriff）」，例えば，労働者の階級利害，を用いて事をすましているために，これが科学的活

動と認識主体の個人的理想との分離を妨げてしまったこと，に言及している[18]。

この点を一層概念的に掘り下げたものが，『支配の諸類型』である。歴史分析のための装置として，彼が階段(Klassen) と共に，身分 (Stände) を重視したことは，いまやわれわれの常識となりつつあるが，この著書で，階級の質的分化に触れている。それによれば，積極的に特権づけられた営利階級（企業者），消極的に特権づけられた営利階級（労働者），それに中間階級（独立農民，手工業者，公的・私的な官僚層など），これら三つからなる営利階級は，財産階級，社会階級とともに，階級状況全体のダイナミックスを構成する（なお，マテリアールな世界における階級像がウェーバー社会学の一面を成すとすれば，もう一つ，宗教社会学から凝視されている，イディアールな親和性（階級と Religiosität）も見落されてはなるまい)[19]。

ところで，消極的に特権づけられた営利階級，つまりプロレタリアートとしての労働者を，熟練労働者，不熟練労働者，半熟練労働者 (angelernte) に分類した後で，ウェーバーは次の様にいう，「カール・マルクスの『資本論』の末尾は中断されたままになっているが，この末尾のところは，明らかに，プロレタリアートが，質的な分化をとげているにもかかわらず (troz seiner qualitativen Differenzierung)，なお階級的統一性をもっているという問題を扱おうとしたものである。この階級的統一性という問題については，機械そのものについて余り長からぬ期間内に習得される半熟練労働が，「熟練」労働や，時としては「不熟練」労働をも犠牲として，ますますその重要性を高めつつあるということが，決定的な意味をもっている」[20]。彼の見方によれば，手工業，工場手工業及び機械装置の導入（＝工場）といった発展過程は，かならずしも熟練労働から不熟練労働へ，といった滑かな移行をみせるわけではなく，新たな技術体系の導入によって，きわめて複雑にからみ合った階級状況が，断え間なく創出されてくる，これがポスト・マルクス時代における形式合理的資本主義の特質というわけである。階級状況の分化と新たな利害の再編成とが，典型的には半熟練労働の形をとって現われてきた，と考えられる。

階級とその統一に関し，彼は，（財産，営利，社会といった階級)「これら三つの階級の種類のいずれを基礎としても，階級的利害関係者の組織化（階級団体 Vergesellschaftung) が成立しうる。しかし，必ず組織化が成立せざるをえないというわけではない。すなわち，階級というのは，それ自体では，単に，個々人が他の多数のひとびとと同様に，同一の（または類似の）類型的な利害状況に置かれているという事実を示すにすぎないのである」，とのべた後で，いわゆるプロレタリアートによる集団的統合が可能か否かをめぐって，「原理的には，それぞれの種類の消費財・調達手段〔生産手段〕・財産営利手段・仕事能力 (Leistungsqualifikation) に対する処分力 (Verfügungsgewalt) が，それぞれ別個の階級状況を設定するのであり，ただ，労働所得に依存している無産者たちが全く「不熟練 (Ungelerntheit)」であり，しかも就業が不安定であるというような場合においてだけ，統一的な階級状況が設定されるのである」[21]。19世紀半ばまでにおける，どちらかといえば統合的意味をもっていった「労働者階級」という概念は，社会変動の激化につれ亀裂を生じ，この概念の明示する利害状況も分岐し始めてきた。利害の分裂と統合をつみ重ねながら，なおかつ階級の統合を主張するマルクス主義者に対し，社会構成体のあり方を徹頭徹尾，概念化し，この概念的明確さを挺子(てこ)に，利害のからみを解きほぐし，これを「下からの」新たな観点から見つめ直したものが，まさに彼の方法論的個人主義といわれるものである。

初期の論文『客観性』では，ウェーバーの集合概念批判は，示唆の段階にとどまったままであった。が，これを一歩進めて個体レベルまでに解体し，この解体作業をへた後で，煉瓦工のごとく組み上げていったものが，例の法律学的カズイスティークで始まる，晩年の大著（グルントリスの一冊)『経済と社会』という伽藍である。ところで，彼の個人主義的理解の方法規準は，狭義の資本主義研究だけをめざしていたのではない。それのみか，社会主義的に組織された経済社会に対しても，社会的行為をその抱かれた意味を解釈することによって理解するという，理解社会学の有効性をせまる。「社会学的に見れば，社会主義経済も，限界効用学説―今後，方法の改良が行なわれるとしても，この点はあまり変わらないであろう―における交換過程と全く同じように，個人主義的に説明するほかないのである。言い換えれば，諸個人―社会主義経済に登場する官僚の諸類型―の行為の解釈を通して理解するほかはないのである。なぜなら，社会主義経済の場合でも，経験的社会学の主たる仕事は，この「共同社会」が成立し存続する方向へ個々の官僚や成員が行動するには，いかなる動機が働いたのか，働いているのか，先ず，この問題から始まる」[22] からである。こうした視座規準のみか，社会主義秩序下における，管理対象としての「労働者」の存在様式も，マルクス思想の

枠組でのそれとはきわめて異なった像として把握されている。政治変革の後でもなお，「個々人の利害一事情によっては，同質的だが相互に相克的な多くの人間の利害が一常に存在しているのである。利害の布置状況が移り変わり，利害確保の手段がちがったものになったとしても，そのような契機は以前とまったくおなじようにあてはまるであろう。たしかに，他人の利害に純イデオロギー的に指向している経済行為が存在するということはたしかであろう。と同時に，一般大衆はそのように行為せず，あらゆる経験に照らしてそのようには行為しえないであろう，ということも同様にたしかである」[23]（ウェーバーの，こうした歴史貫通的な闘争史観が，はたしてホッブスの影響だけによるものであるのかどうか，これは今後の思想史の課題にのこる）。

(3) ブルツクスのロシア経済観

帝政ロシアからソヴィエト政権成立期にかけ，多くの学者，文化人が祖国ロシアをあとにした。ロシアの経済学者，ボリス・ブルツクス (Boris Brutzkus) もその一人であった。彼はロシア革命が成功してからも，しばらくロシアの大地に踏み留まっていたが，後に当局によって追放され，西側に逃れた。F. ハイエクは次のように語る。ブルツクスは，「1907年から1922年にかけ，ペテルスブルグで，農業経済学を担当する教授であった。その間，ロシア農業の研究では，この道の第一人者とあおがれてきた。教授は，隣接領域に多大の関心を払いつつ，この専門領域の理論的な発展に貢献してきた。……だが，その年の暮，彼は無理やり祖国から追放されて，ドイツに移った。そして，ベルリンにあるロシア科学研究所の教授を10年つとめた」，次いでハイエクは，『ソヴィエト・ロシアにおける経済計画』という著書に収められたブルックスの論文，「ロシア革命の観点からみたマルクス主義の教義」に関し，「本書は，ほんの数ケ月前にドイツで刊行された，ミーゼス教授，マックス・ウェーバーの著作同様，こんにち社会主義をめぐる経済問題の論争に火をつけた，一連の研究の中でも主要なものとみなさねばならない」[24] と語っている。経済計算，とりわけ現物（実物）計算をめぐる理論的な論争は，一方で「幾分，ユートピア的な社会改革者」[25] であり，後にウィーン学団の創始者となって活躍した O. ノイラート，他方でウェーバー，ミーゼスから発し，後に O. ランゲ[26]対ミーゼス[27]，ハイエク[28]などへと発展したものであるが，ほぼ同一の立場から経済計算を考察していた，ウェーバーとミーゼスは，反ノイラートという意味で意を同じくした。これと同様に，ブルツクスとウェーバーの間でも，全く学術的な交流のないにもかかわらず，社会主義の問題をほぼ同じ視角から分析を加えている事は興味あるところである[29]（ウェーバーの社会主義論については，別稿で論述したので，以下では主にブルツクスに視点をあてて論ずる）。

社会主義経済をめぐる，ブルツクスの基本的な考え方は，ウェーバー流にいえば，流通経済と計画経済の対抗，として捉えることができるであろう。市場を破棄した現物経済を経済システムの理想 (natural socialism) と考えるマルクス主義者に対し，ブルックスは，古典的意味における，市場原理に基づいた資本主義のメカニズムをその対極にもってくることによって，ロシア革命発生期にみられたマルクス主義の幾つかの理念を検討してゆく。彼によれば，資本主義的生産様式の無政府性を克服する社会主義とは，統一的な国家プランに従って，中央集権的に国民生活を管理してゆくものである。社会主義の下では，"each according to his abilities, to each according to his needs" という分配的正義を実現するために，市場価格を廃止する。そのため，資本主義の基本的カテゴリー（労働・資本・自然）は意味を失い，唯一の生産費用の形態が労働費用となる。そこで，社会主義企業体の経営者は，生産要素を組み合わせ収益をあげる，私的企業家の行動とは当然異なってくる。つまり，割りあてられた計画にそって誠実に生産活動を営む，単なる官吏 (official) と化する。「自由 (liberty) がブルジョアジーの指導原理であるとすれば，平等 (equality) は，工業労働者の合言葉である」[30]。

社会主義経済の基礎を現物経済に見い出し，その理論的発展の契機をつくり出した人物は，先にのべたノイラートである。ウェーバーはいう，「現物計算の問題は，最近の「社会化 (Sozialisierung)」の風潮を機会にして，とりわけオットー・ノイラートの多くの著作によって，ふかく論じられてきた。……ただ問題（の追究）は，世間で行なわれているような一従来の一議論が終わるところで，始まるのである」[31]。

統計学上の諸技術の活用によって，未来の経済運営に活路を見い出すこと，これが経済計算をめぐる論争の一局面であった。ノイラートは，社会化の本質とは現物経済の追求であり，かつまたその理想実現の手段として，統計学に大きな期待をよせた（同様に，レーニンにも抱かれたフシがある）[32]。これと共に，資本計算に従事するスタッフと，社会主義経済における，現物計算を遂行するそれとが，同一の経済行為を営むという素朴な見解

が，「統計」技術の利用可能性に親和感をみせていた。こうした動きに対しウェーバーは，「計算業務に従事している大量の「商業ホワイトカラー」のスタッフを，一般統計の業務に従事する職員に変えればよい，という考え方がある[33]。このおきかえによって，商業計算を現物計算に変換しうると信じられているのである。しかしこの考え方は，両者を動機づけている誘因がまるでちがっているということを見落としているばかりでなく，「統計 (Statistik)」と「計算 (Kalkulation)」との機能の根本的な相違にも気付いていない，といわねばならない。官僚 (Bureaukrat) と企業家 (Organisator) とがちがうように，この両者はまったくちがっている」のだという，経済行為の動機分析と独自な貨幣計算のもつ形式合理性を根拠に，こうした立場を批判した。なぜなら，貨幣は，「これを純粋技術的な観点から見た場合，「完全無欠」な (vollkommente) 経済計算の手段，すなわち，経済行為の指向における形式的に最も合理的な手段」[34] だからである。ウェーバーの，こうした経済社会学をひきつぐかのように，ブルツクスは次のような問いを出してくる。

生産要素を調整する指標である，市場価格を介さずに，どのようにして需要測定を行うのか。はたして社会主義秩序のもとで，労働者層や企業体経営層から，自主的な労働インセンティヴを期待することができるのか。労働密度に有利な効果を及ぼすと推測しうるような，十分な根拠がロシア革命にあるのであろうか。

強まる階級闘争は，本来，労働者が生産活動へと専念すべき集中力とエネルギーを逓減させざるをえない。それでは経済建設の失敗は，なによりも労働者の主体的条件が未熟なるがためであろうか。生産を私的企業から社会に移転したとしても，これは，労働者が意識的に自己の利益と社会のそれとを同視していることを意味していない[35]。既存のヒェラルキーを廃棄する社会主義革命は，現存の労働規律を破壊せねばならないが，それと同時に，これに類似した規律を復活させるため，国家幹部は多大の努力を傾注しなければならない。こうした規律の復活は，生産性の低下から必然的に叫ばれるものである。そのため，労働者の主体的条件，つまり利己心なき行動 (disinterested action)，自己犠牲 (self-sacrifice) に訴えようとする。だが，かかる宗教心に類似した動機を，経済体制の基底にすえることは難しい。というのも，労働効率の減退は，なによりも，不利な外的条件，経済システムの解体，低位な生活水準に左右されているからである。そして，これの原因は，生産者組織の心理を分析することで，解決の糸口を見い出すべきものであって，一方的に労働者の心理 (the psychology of the working class) をとがめるべきものではないからである。

プライス・メカニズムを前提とした資本主義のもとでは，企業体が成功するか否かは，ある種の人間的主体の要件，すなわち経営者の性格いかんにかかっている。「発展をうながすものは，組織者であり実務家である。彼らの任務は，けっして科学的発見や発明といった分野にあるのではない。むしろ，様々な商品を最小の費用で生産するとの意図のもとで，生産諸要素を最適な形で組み合わせること，社会の需要充足という目的に向けて，より安価なコストで，完全な手段をみいだすこと，或いは，新たな社会的欲求やそれらを充たすための効率ある生産方法をうみだすことにある[36]。それ故，何よりも，人間の物質的欲求に関心を払う企業家というものは，当然の事理ながら，理想主義的な動機によって導かれるのではなくて，己の豊さを求めることによってその活動を促進されるのである。……個々の資本家の間で戦われる競争によって，彼らは提供された革新 (innovation) をとことん採用せざるをえないのである，しかもできるだけ迅速に」。

この組織者，企業家の心理こそ，市場淘汰に脅かされつつも，高度な責任感 (high responsibility)[37] を支えるものである。この革新企業家の意義については，1912年刊のシュムペーターによる著作，『経済発展の理論』の方が人口に膾炙されているが[38]，ブルツクスやウェーバー[39]も，限られた叙述の範囲でではあるが，明らかにこれの意義を射程内に収めていた。

ブルツクスの主張する，労働の比較類型とでもいうべき内容は一体どのようなものであろうか。これについては，前に少し触れたが，資本主義のそれと比べた場合，「経済組織者の心理は，社会主義のそれとは全く別物である。この場合，彼は単なる役人〔官史〕にすぎない」[40]。たとえこの制度のもとでも，いわゆる企業家の精神というものが完全に喪失する，というわけではないが，それでも経済生活をすみずみまで支配する官僚制化のために，創造的革新は抑圧されてしまう。事業の成否いかんに拘わりなく行使される非営利的行為は，まさしくオフィシャルの意識に一般的につきまとう現象である。だが，創造的な経済活動 (creative economic activity) とは，形式的精確さをもって，自分の義務を遂行すること以上のものを必要としている。この創造性を促進し，企業家精神を発揮せしむる外的条件は，交換経

済システムの中にある[41]。無数に及ぶ経済財の価格設定と，その変動が労働の配分を決定し，これが現実の社会的需要を反映したものとなる，そうした交換メカニズムである。これを廃して権威主義的な分配方法に代替したとしても，これはそもそも個人の選択的欲求を基礎とした組織でない以上，むしろ「上からのもの」にとどまる限りは，生産性をおとさざるを得ない。上位から強制されたものである以上，分権的社会機構とは異質な，行政と経済，この二つの官僚機構の合成体となってしまう[42]。この巨大な傘のもとでは，個人の経済的イニシアチブのみならず，政治的な自由も制限され，ひいては個人の判断力を自分の意志で涵養するような，そうした市民的自律のチャンスが著しく衰退してしまうことになる。そして，「自由の王国 (realm of freedom)」の実現が，いったん Sekte やアソシエーションをろ過した後の，国家の死滅によるのではなく，パラドクシカルな方向，つまり国家を通して (through the state) 行われる，というアイロニーにみちた事態を示すことになる[43]。「本著者（ブルツクス）は外部の世界との交流から遮断されて，オーストリア並びにドイツの学者の，同様な労作を知り得なかったにも拘らず，その主たる結論に於てはミーゼスとマックス・ウェーバーの議論に著しく似ているものなる事を示している」[44] とのハイエクの結論は，正しいというべきである。

今まで論じてきた，ブルツクスの論文は，たしかに現代の，複雑化し多様化しつつある社会主義諸国の現状をみつめる上で，かならずしも充分な視点を有しているとはいえないであろう。だが，ハイエクのいう通り，彼の理論は，ロシア革命の動乱という歴史的な経験をかいくぐって熟成されてきたものであった。そしてそのベースには，広義における人間行為論，すなわち経済行為をその動機にまで立ち入り，しかもその動機に固有にみられる特質を，外部メカニズムとの有機的関連のもとで分析したものである。その意味からいうと，20世紀初頭，『客観性』論文で，社会主義を科学的に研究することの必要性を指摘してやまなかったウェーバーの意向に，はからずもそったもの，それがブルックスの経済社会学の一面であった，といえるであろう。「そもそも計画経済を人は採用すべきであるかどうか〔その意味および範囲はどうともあれ〕，という問題は，もちろんそのままのかたちでは科学的な問題であるとはいえない。科学的には，われわれはただつぎのことを問題にしうるにすぎない。すなわち，計画経済は〔与えられた形態において〕いかなる結果をもたらす可能性が高いであろうか，したがってまた，もしそのこころみが実行されたならばいかなる弊害を甘受しなければならないか，ということがそれである。その場合，若干のよくわかっている要因を考慮にいれるだけでなく部分的にしかわかっていない諸要因をも同様に考慮にいれるということを，あらゆる側面からみとめることが，公正を保持する上で絶対に必要な条件である」[45]，と。

註

1) 吉田昇三『ウェーバーとシュムペーター』18ページ。
2) Max Weber, Der Sozialismus, in Gesammelte Aufsätz zur Soziologie und Sozialpolitik, 1924. s. 505. 濱島朗訳『権力と支配』203ページ。
3) Wax Weber, Wirtschaft und Gesellschaft, fünfte, revidierte Aufl. s. 308. 武藤一雄他訳『宗教社会学』160ページ。
4) Ibid., s. 275. 前掲訳書81ページ。
5) 内田芳明『ヴェーバーとマルクス』53ページ。
6) 前掲書10ページ。
7) 金子栄一『マックス・ウェーバーの研究』4. 因果的適合性の程度と確率の問題，60ページ以下参照。
8) 前掲書48ページ。
9) 大塚久雄『生活の貧しさと心の貧しさ』自然と社会307ページ。及び Johannes Weiß, Max Webers Grundlegung der Soziologie, ss. 88.
10) K. ポパー『果てしなき探求』124ページ以下。
11) なおウェーバーは，『文化科学の論理学の領域における批判的研究』で，確率論に触れながら，『客観的可能性の概念について』，『確率論の諸原理』などを著わした，生理学者 L. v. クリースや，「レキシス (Lexis) 以来の最もすぐれたドイツの統計学者」（シュムペーター）で，かつ，マルクス理論の構造分析，マルクス地代論の研究とともに，統計の分野で貢献した，L. v. ボルトキウィッツの名をあげている。Max Weber, Wissenschaftslehre, 4. Aufl., s. 269-270. だが，事象の質的側面に関心を寄せる社会学は，自ずから統計的方法に限界を課する，cf. T. Abel, Systematic Sociology in German, pp. 136.
12) Max Weber, Gesammelte Politische Schriften, Dritte Aufl., 1971 s. 9. 訳『国民国家と経済政策』ウェーバー政治・社会論集，13ページ。
13) Carl Menger, Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften und der politischen Ökonomie insbesondere, 1883. 福井孝治・吉田昇三訳『経済学の方法に関する研究』40ページ以下。Thomas Burger, Max Weber's Theory of Concept Formation, pp. 141.
14) Max Weber, Die Objektivität sozialwissenschaftlicher u. sozialpolitischer Erkenntnis, in G. A. z. W., s. 204. 富永祐治他訳『社会科学方法論』93-94ページ。

15) Ibid., s. 166. 邦訳38ページ。
16) Ibid., s. 167. 同40ページ。
17) Ibid., s. 166. 同39ページ。
18)「現今の社会はとくに階級的な分化が顕著であり，しかも，特殊的に営利階級の姿をとる度合が大きい」Max Weber, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, I. s. 274. 大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』96ページ。
19) イスラム社会をめぐる，マルクスとウェーバーに関して，近刊の好著，B. S. Turner, Weber and Islam, 1974. chp. 11. 及び，Marx and the End of Orientalism, 1978, pp. 44. を参照。
20) Max Weber, W. u. G., s. 179. 世良晃志郎訳『支配の諸類型』213ページ。K. Marx, Das Kapital, Dritter Bd., Dietz Verlag, 1969. ss. 892. 向坂逸郎訳『資本論』第三巻，第五二章諸階級，も参照。
21) Ibid., s. 177. 同訳208ページ。
22) Ibid., s. 9. 清水幾太郎訳『社会学の根本概念』29-30ページ。
23) Ibid., s. 119. 富永健一訳「経済行為の社会学的基礎範疇」『世界の名著50，ウェーバー』481ページ。
24) Boris Brutzkus, Economic Planning in Soviet Russia, Forward ix.
25) ファイグル『亡命の現代史5 アメリカのウィーン学団』229ページ。脇圭平『知識人と政治』73ページ。
26) オスカー・ランゲ『政治経済学』I（竹浪祥一郎訳）第5章参照。
27) L. v. Mises, Die Gemeinschaft, s. 100.
28) F. Hayek, Individualism and Economic Order.
29) Weber, Ibid., s. 58. 富永訳358ページ。ミーゼスの側からみたウェーバー観については，Gemeinschaft (Eng. trl. Sosialism-An Economic and Sociological Analysis) 以外に，Human Action-A Treatise on Economics. Epistemological Problem of Economics, 2. Sociology and History. を参照。ミーゼスの個人史については，彼の妻，Margit Mises, My Years with Ludwig von Mises. が比較的参考となる。ちなみに，彼の弟 R. v. ミーゼスは，世界的数学者として知られ，H. ハーン，P. フランクとともに，論理実証主義運動の重要メンバー。また，ミーゼスは，1940年，ナチスの弾圧をのがれて妻と米国に亡命したとき，ニュージャージーの埠頭で，彼ら二人を迎えたのが，ウェーバーの社会的行為論を E. フッサール現象学の側から深めた者として有名な，同じ亡命者 A. シュッツ (A. Schütz) である。このシュッツのウェーバー理解社会学については，初期の論文，Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt，第1章及び第5章を参照。ウェーバーを離れない，現象学的研究は，M. Roche の Phenomenology, Language and the Social Sciences, 1973 が，今のところ好入門書であろう。
30) Brutzkus, Ibid., p. 8.
31) Weber, W. u. G., s. 57. 富永訳355ページ以下。及び O. Neurath, Wesen und Weg der Sozialisierung, 1919. Können wir heute sozialisieren? 1919. Empiricism and Sociology, ed. by. M. Neurath and R. S. Cohen, chp. 5. 又，マルクス経済学の立場からの，幾多の問題を含む論文，富沢賢治『生産手段の「社会化」という概念について』，社会科学の方法，6月号1978. も参照。
32)「これらの不十分な説明から，レーニンが統計学をどう解していたのか，はたして貨幣計算を考えていたのか，それとも現物計算を考えていたのかを推測するのは難しい」，L. Mises, Economic calculation in the socialist commonwealth, in Collective Economic Planning, p. 128. 邦訳 H. ハイエク『集産主義計画経済の理論』迫間真治訳，139ページ。
33) レーニンは，「国家死滅の経済的基礎」の箇処で，共産主義までに到る過渡期の社会主義では，あくまでも資本主義のもつ優位性を徹底的に学習する必要がある，という現実政治家としてのザッハリヒカイトを示すと共に，「量から質へと」完全に移行した社会では，次のような事業になるという，「(労働と生産物の）計算と（生産と分配の）統制—これが，共産主義社会の第一段階が「具合よく運営される」ために，ただしく機能するために必要とされる主要なものである。……これを計算し，これを統制することは，資本主義によって極度に単純化され，監督や記録，算術の四則の知識や適当な受領証の発行といったような，読み書きのできるものならだれにでもできる，きわめて簡単な操作にかえられている」，と。レーニン『国家と革命』宇高基輔訳，141ページ。
34) Weber, W. u. G., s. 45. 富永訳 332 ページ。
35) Brutzkus, ibid., p. 78.
36) Ibid., p. 68 f.
37) Ibid., p. 81.
38) 吉田前掲書，第5，6章参照。
39) Weber, ibid., s. 121. 富永訳 484 ページ。
40) Brutzkus, ibid., p. 82. L. Mises, Human Action, p. 254.
41) Cf. Mises, ibid., p. 255, 258.
42) Ibid., p. 691.
43) Brutzkus, ibid., p. 76.
44) Hayek, ibid., p. 35. 迫間訳45-46ページ。
45) Weber, ibid., s. 61. 富永訳364-365ページ。